『#戦国十二刻 女人阿修羅』（木下昌輝著）を読んでみた。著者は、ハウスメーカー勤務を経てフリーライターとなる。2012年『宇喜多の捨て嫁』でオール読物新人賞を受賞しデビュー。

本書は、『戦国 24 時 さいごの刻』、『戦国十二刻 始まりのとき』に次ぐ第三作目の戦国時の短編集である。今回は戦国時代の女性が歴史の重大局面に接する24時間：十二刻をテーマとしている。各編には「謎」が仕掛けられている。決定的な瞬間に向け、刻一刻と変化していく状況の中で、それぞれに趣向を凝らしたサスペンスフルな七つの物語が展開する。限られた時間の中で事態が進行する中で、秘められた真実、隠された想いが明らかになっていくという趣向がほぼ各話で共通していおり、各話ともどんでん返しが待っている。

「戦腹」

臨月を迎えながら家康軍に従軍した阿茶の局の奮闘ぶりを通じて、長久手の戦いで家康が勝利するまでの十二刻を描く。最後の場面を読んで、武将とはそこまで先を読んで、こんな非情なことをするのかと驚いてしまう。家康が阿茶の局に行ったこととは？

「殉妻」

細川ガラシャを救出しようとするある企てと本能寺の変の驚愕の真実の果てに、彼女が炎の中に消えるまでの十二刻を描く。

「祈刀」

織田軍に包囲され、絶望的な状況となった高遠城で、愛する夫に恐ろしい疑念を抱いてしまった花が高遠城を脱出するまでの十二刻を描く。

「醜愛」

数々の求婚者を袖にして、美僧との情事に溺れる贅姫に対して、思いもよらぬ愛の証を示して吉川元春が婚約を成立させるまでの十二刻を描く。結末を読んで嘘だーと叫んでしまった。結婚しようとする女性にそんなことをするかい？

「聖室」

愛する妻・ジュリアを傍らに、悲願である神の国をこの地に作るために島津軍に決戦を挑んだ大友宗麟の軍が耳川の戦いで壊滅するまでの十二刻を描く。神や仏を盲信する者たちの恐ろしさを知る（誰を一番の敵と見なすのか）。

「鬼妹」

息子と兄がにらみ合う中に割って入った義姫の行動から、彼女の秘め隠された内面を描きつつ、彼女が伊達家と最上家を和睦させるまでの十二刻を描く。

「証母」

岐阜城で兄・信雄の軍に包囲され、生母を人質にすることを求められた織田信孝の、幼い頃に生き別れた母への複雑な想いと共に、彼が母を犠牲にして和睦するまでの十二刻を描く。母親の愛情とはこんなものであろうと、私は意外には思わなかったが・・・

戦国時代の女性に求められたこと

家制度と忠誠

- ・家の名誉を守ること：女性は「家」の一員として、名誉や秩序を乱さないよう慎み深く振る舞うことが求められた。
- ・夫への忠義：武家の妻は夫に忠誠を尽くすことが美德とされ、夫が戦に出ている間は家を守る役割を担った。
- ・嫁入りと婚姻：政略結婚が多く、女性は家同士の同盟の「架け橋」として振る舞うことが期待された。

教養と内助の功

- ・礼儀作法の習得：茶道、書道、和歌などの教養が重視され、これらを通じて品位ある振る舞いが求められた。
- ・家事・育児・財政管理：家の中を切り盛りする「内助の功」が重んじられ、特に武家の女性は家臣や使用人の管理も担った。

戦乱と女性の強さ

- ・女城主・女武者の存在：井伊直虎や立花闇千代のように、家督を継ぎ、領地を守った女性もいた。彼女たちは例外的ながら、戦国の混乱期においては「強く賢く振る舞う」ことが許容される場面もあった。
- ・籠城戦での活躍：城が攻められた際には、女性たちが兵糧の管理や負傷者の看護、時には武器を取って戦うこともあった。

倫理と規範

- ・『女大学』の影響（江戸初期に成立）：戦国時代末期から江戸時代にかけて、女性の理想像として「三従の教え」（幼少期は父に、結婚後は夫に、老後は子に従う）が広まった。これは戦国期の価値観にも通じる部分がある。

評価：★★★★☆